

秀 賞

人を認める大切さ

福島県金山町立金山中学校

三年 須 佐 円 果

「『好きこそものの上手なれ』だよ。」

卒業式の日、ある先輩が私に最後にかけてくれた言葉です。

私は中学校のバレーボール部に所属しています。三度のご飯よりも、夜、布団に入った時のあの幸せな瞬間よりも、バレーボールをすることに幸せを感じています。しかし、私のバレー愛はチームメイトには受け入れてもらえなかったようでした。

我が校の部活は少人数のため、男女共にバレー部一つだけです。そのせいか部員のバレーへの関心には差が大きく、コートに入れる六人の気持ちもそれぞれでした。そんな状況の中、私はチームで浮いた存在になってしまいました。それにはつきり気づいたのは二年生の後半、私達のチームになってすぐでした。部活に対する取り組み方、積極性の違い、試合や練習の時に私にトスを上げないようにしていたことなど、毎日の部活で私の気持ちは少しずつみんなと離れていきました。また、そのようなことが毎日続き、部内の雰囲気は悪くなっていきました。

それから三年生の最後の中学生連が近くなるにつれ、私とチームメイトとのずれはさらに大きく目立つようになります。そして二年生の後半、さらなる

意見や考え方の違いで孤立することになりました。私は、バレーはコミュニケーションが大切だと考えていたので、メンバーみんなが声を出さないことが我慢できず、声をたくさんかけました。しかし、私の気持ちがみんなに通じることはありませんでした。その後、「私はバレーをやるべきじゃない」と感じる時が増えていきました。

そんな中迎えた三年生の卒業の日。いつも同級生の中で浮いていた私は、寂しさと不安な気持ちでその日を迎えました。

別れの時、ある先輩が私の前に立ち、握手をしながらこう言いました。

「『好きこそものの上手なれ』だよ。あと、〇〇高校に女バレ（女子バレー部）あるから！ 待つてるよ！」

一言葉になりました。その先輩は私が尊敬している先輩でした。

あれは二年生の三学期、私が一人でスパイクの練習をしていた時のことです。毎日、私の見ている世界はモノクロでばやけた感じだったのを覚えていました。いつも色のない暗い世界にいるような気がしていました。

「俺もいい？」

あの先輩でした。この一言で世界が極彩色に一瞬で変わるのを感じました。先輩が私の練習に付き合ってくれたのです。その驚き、その喜びは到底表現することができませんでした。先輩との練習は驚くことばかりでした。上手な選手と一緒に練習していると、その人に引き付けられるように自分のプレーも向上するという不思議な感覚を味わいました。たった数分間でしたが、先輩との練習は今までに感じたことがないほど楽しいものでした。

そんな先輩に「好きこそものの上手なれ」という

言葉をもたらした時、「私のバレー愛を分かってくれ人」がいた、確かな理解者ができたと感じることでできたのです。

この経験は私にとって、それまでのバレー人生で最も濃く、価値あるものになりました。また、それまでみんなに分かってもらえないという苦しいことが続いていたので、「私はバレーをやるべきじゃない」という気持ちと、バレーを好きなままでもいいという気持ちが両方あって、進路にも悩んでいました。しかしこの体験から、「高校に進学してからもバレーを続けよう、続けていいんだ」とバレーがどうしても好きな自分を肯定的に受けとめることもできるようになったのです。最終的に私達のチームは最後まで変わることなく、約三年間のバレー部の活動は幕を閉じました。会場を後にする私の心に残ったのは、考えが合わなかったチームメイトに対してではなく、納得のいくプレーができなかった自分自身に対しての悔しさ、そして「やっぱりバレーが好きなんだ」という未来へと続く強い気持ちだけでした。

人は、自分を分かってくれる、自分を受けとめてくれる存在がいることに気づいた時に生きる「ちから」をもらえるのだと感じます。私も先輩という存在があったからこそ、今、未来に向かって歩くことができるのだと思います。生きる力をくれた先輩には感謝の気持ちでいっぱいです。人を理解する、受けとめる大切さやその意味を自分なりに理解できたからこそ、私も人を認めることができる、器の大きな人になりたい、と思います。過去の嫌な思い出にしばらく、未来で出会う人や出来事を大切にしてい、明るく、強く生きていきたいです。それが先輩への恩返しにもなるのではないかと思います。

作文を書くに当たって

私はこの作文を通し、「好き」という単純な感情も持っている力を伝えたいと思いました。実際、私はバレーボールは上手ではないし、背も低いので、他の選手と比べると劣っている部分は多いと感じます。それでもバレーボールを続けたいと思うのは、好きだからだと思います。そのことを伝えられる機会をいただけたことに感謝します。